

イタリア戦線におけるドイツ軍(1)

松井史衛



1943(昭和18)年5月、北アフリカのチュニジアでドイツ・イタリア軍がアメリカ・イギリス連合軍に降伏した。

そして連合軍の次の目標は、とうぜんイタリア本土と目されるようになった。

当時、南イタリアのドイツ軍は8コ師団が配備されており、南方軍総司令官アルバート・ケッセルリング元帥(空軍)によって指揮されていた。名将のほまれ高さ彼は、今まで後方から北アフリカのロンメル元帥に対して物資の補給

をくり返してきた人物である。

58歳の彼は、同じ元帥でもロンメルより6歳年上であった。元来、砲兵の出身だが、空軍の創設にさいして陸軍から引抜かれ、1939年のポーランド進攻のさいは第1翔軍司令官、さらにバトル・オブ・ブリテンでは第2翔軍を指揮した。

その後、南方軍総司令官となり、地中海・北アフリカ方面の戦いを指揮したが、これから述べるイタリア半島の戦闘での活躍で、敵味方双方から高い評価を得ている。

彼は、イタリア軍との関係をう

まくやっているよう心を砕いた。何しろイタリア軍の将軍達は米英派も多く、部隊の装備も悪いのでどこまで戦力として信頼できるかわからないのだから、彼の苦労たるや察するにあまりある。

しかも、「永遠の都ローマ」の南に司令部を置く彼を心配させたのは、連合軍の爆撃機が1943年7月19日、ついにローマ市を爆撃したことである。感情的になってわめき散らすイタリア人には、早くも厭戦気分が現れ出した。

その上3月以降、イタリア国内のストライキが繰り返されてドイツからの軍需品の輸送がままならない。生活必需品も不足がちになり、文句のハケ口はもっぱら駐留するドイツ軍に向けられた。

「我々は貴方達の国を守るためにいるのです」

ドイツ宣伝中隊はマイクで声をかからして叫び続けた。しかし負けてばかりいる戦況は、一層イタリア国内の不満を増大させた。今や連合軍のイタリア本土への上陸は

シチリアの海岸に接岸するイギリス軍のLST



時間の問題となった。

ところが奇怪なことに、ヒトラーと国防軍最高司令部では、連合軍が南イタリアよりもバルカン半島に上陸してくるのではないかという誤った判断を下していた。

この原因は、ドイツが頼りにするルーマニアの油田に対する過度の心配にあったが、このため、イタリアへの軍需品分配と部隊の強化はとかく真剣味を欠く結果になっていた。

シチリアの攻防戦

ケッセルリング元帥は、連合軍がオーソドックスな戦略をとることから、すぐにはイタリア本土に上陸してくるとは思っていなかった。

イタリアの長靴半島の先端、というより北アフリカとイタリア本土との間に三角形をしたシチリア島がある。この島は地中海の島の中では最大で、面積は24,715km²。つまり太平洋戦争の激戦地となったガダルカナル島の4倍近い大きさがある。そして、果物やオリーブを産する硫黄系の地質である。

連合軍としては、まずこのシチリアに足場を作り、飛行場を設営して戦闘機の傘の下にイタリア本土へ上陸しようというのが戦略の常識である。

そこでケッセルリング元帥は、ハンス・フーベ大将指揮下の第14機甲軍団に同島を防衛するよう命じた。フーベ大将は53歳。過去、スターリングラード戦にも参加しており、この後第1機甲軍司令官として再び東部戦線に戻って行く。

また、シチリアではアルフレート・グッツォーニ大将のイタリア第6軍もドイツ軍と力を合わせて同島を守ることになった。



ドイツ軍に向かって砲火を開くイギリス軍のピショップ自走砲

ドイツ軍にはヘルマン・ゲーリング機甲擲弾兵師団が参加しているが、同師団は元のヘルマン・ゲーリング旅団を昇格、改編したもので、北アフリカで壊滅後、6月にフランスで再編成され、大急ぎでシチリアに送られたものである。また第15機甲擲弾兵師団も、チュニジアから逃れてきたドイツ・アフリカ軍団の第15機甲師団の生き残りを基に再編された部隊である。

戦いはイニシアチブを握る連合軍がとり、ドイツ・イタリア側は

これを防ぐという受け身の戦闘である。

シチリア進攻作戦は、連合軍側では「ハスキー作戦」と呼ばれ、アメリカ第82空挺師団が1943年7月9日の夜、同島南西岸のジュラ海岸の背後に降下、同時にイギリス第1空挺師団の内の第1グライダー旅団は、南のシラクサ地区に降下して、ポンテ・グランデの橋を占領することになっていた。

双方共海から上陸する味方部隊のため、敵の交通路を遮断して上

シチリアで撃破されたHG師団のティーガーI重戦車





ドイツ第14機甲軍団長フォーベ大将

陸地点へのドイツ軍の移動を妨げるためだ。

だが、北アフリカからC-47輸送機に曳かれて離陸した115機のウェイコ・ハドリアン・グライダー(合計1200名が搭乗)は、ドイツ軍の通信妨害と対空砲火によって目標地点を誤り、島内に着離できたのは半数に過ぎず、正確に目標に降りたのはたった12機という有様だった。しかし、100名足らずの人数で橋を制圧し、1日遅れた7月10日、島の南部に主力が上陸に成



同南方軍総司令官ケッセルリング元帥

功、降下部隊の失敗にもかかわらず作戦は予定どおり進み始めた。

アメリカ第7軍(パットン中将)は南西岸へ、イギリス第8軍(モントゴメリー大将)は東岸だ。

アメリカ軍の分担地区には、イタリアの沿岸警備師団2コと同旅団1コとがいた。しかし、これらは移動できない張りつけ部隊であるから、離れたところに上陸されると反撃することができない。唯一の例外は、ジュラ海岸に近い第18沿岸警備旅団だった。

彼等はフィアット3000軽戦車とフランスから分捕ったルノーR35軽戦車をくり出す。このため、アメリカ第82空挺師団は第7軍に救援を求めた。

第7軍の要請を受けた沖の軽巡洋艦ボイス(アメリカ海軍・15.2cm砲15門)が、イタリア戦車に猛射を浴びせて撃退に成功する。

他方、ポンテ・オリボ飛行場のヘルマン・ゲーリング師団の戦車も、アメリカ軍の橋頭堡へ向けて進撃を開始した。

翌7月11日、上陸用舟艇から降りたばかりのアメリカ第1師団の歩兵は浮き足立ってしまう。まだ対戦車砲等は沖の輸送船から降ろすひまがなかったのだ。ハンディー・トーキーを持った将校がマイクに向かってがなり立てた。

6輦のティーガー戦車を先頭に立てたIV号戦車の一隊がやってくる。付近にはイタリア歩兵の姿も見える。危機一髪という時、アメ

シチリア島において山頂から平野部を監視するドイツ兵



リカ駆逐艦6隻と軽巡サバンナ(15.2cm砲15門)が駆けつけた。そして、海岸の林を見えがくれに走る戦車を乱射したのだ。しかも反撃するドイツの戦車砲はほとんどアメリカ艦隊に命中しない。

もっとも戦車砲は、その有効射程からいっても、またその照準装置の性能からいっても走っている軍艦に命中させるのはもともと無理な話だ。

こうしている間にも、パットン中将は沿岸に向かって北西に進み、モントゴメリー大将は島の中央部に向かって北進した。そして7月22日、北岸の重要な港パレルモを占領する。

イタリア兵はいつの間にか退却してしまったが、その後にヘルマン・ゲーリング機甲擲弾兵師団が立ちふさがり、イギリス第8軍の前進を阻んだ。エトナ山の南西方で同軍の第51、78両師団の進撃はびたりと止まってしまう。第51師団は、エル・アラメインの戦いでロンメル元帥のアフリカ機甲軍を打ち破った戦歴を誇る部隊だ。

しかし、ヘルマン・ゲーリング師団とエトナ山の山腹に陣を張ったフーベ大将のシュマルツ集団の反撃によって島の北東で喰い止め

シチリア島からメッシナ海峡を隔ててイタリア本土をのぞむ



モントゴメリー大将とパットン中将(上)
米第5軍司令官クラーク中将(右)



られてしまった。このため、イギリス軍はチュニジアに残してきた山岳部隊を急きよ呼び寄せることになった。

補助部隊を集めたシュマルツ集団でさえ、これほどの抵抗力を示したのだ。山地では戦車はほとんど役に立たない。持ち運びの容易な迫撃砲こそおあつらえ向きの兵器だった。

進撃を阻まれたモントゴメリー大将は焦った。しかし8月5日、イタリア第6軍が浮き足だってきたため、さしものヘルマン・ゲーリング師団も側背に回り込まれる恐れが出て撤退を開始した。

コンラート中将の撤退ぶりは見事だった。イタリア軍の背後を援護しつつ、夜にまぎれて戦車を北東の港メッシナから本土へ、上陸用舟艇シーベルやMFPに乗せて運

んだ。制空権を連合軍に握られているので、昼間は船が動けないのだ。

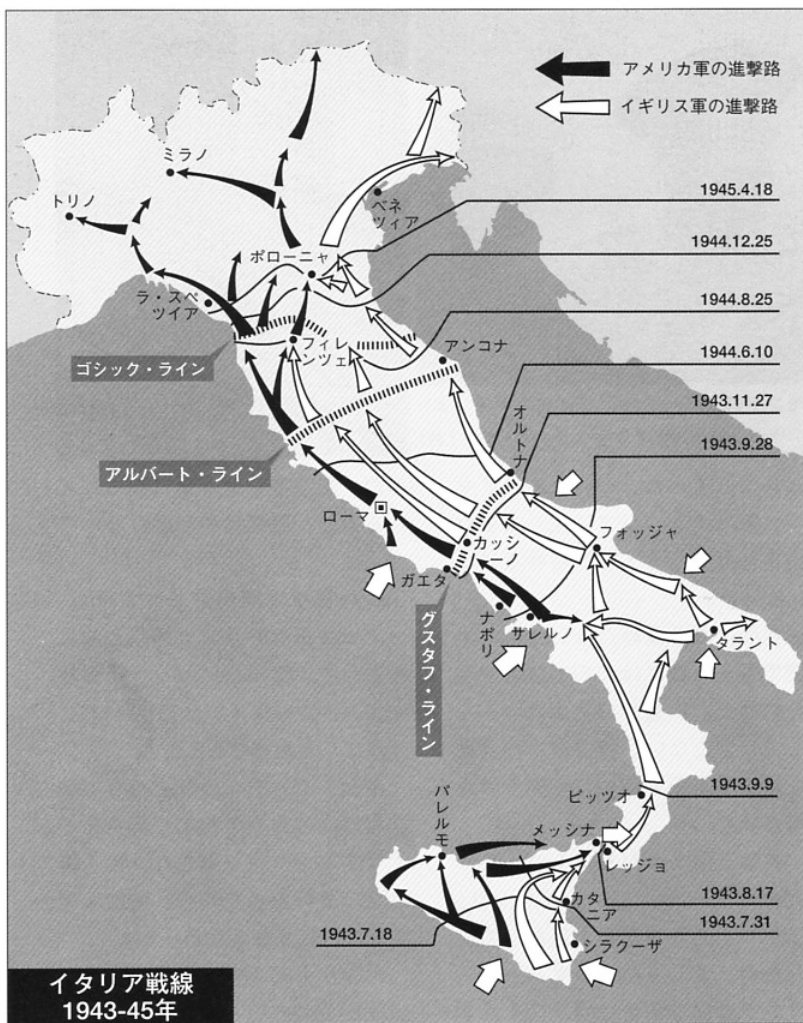
第14機甲軍団長フーベ大将も、ヘルマン・ゲーリング師団と共に撤退した。幅10kmのメッシナ海峡を渡ると、もうイタリア半島の先、カラブリア地方である。

夜間、エンジンの音を絞って輸送艇はこっそりと戦車や兵員をイタリア本土へ送り返した。輸送艇の数は少なかったから、何度も往復しなければならなかった。

アメリカ軍の先陣、第3師団が古代からの歴史を誇るメッシナ市へ突入したのは、1943年8月17日の朝10時15分だったが、すでにドイツ軍はいなかった。パットン中将は、ドイツ軍機甲部隊を逃がしてしまったことをくやしがつたが、

シチリア上陸時の連合軍側編成

第15軍集団(アレクサンダー大将)
(イギリス)
イギリス第8軍(モントゴメリー大将)
第30軍団
カナダ第1歩兵師団、第51歩兵師団
第13軍団
第5歩兵師団、第50歩兵師団
第1空挺師団
第9歩兵師団
第78歩兵師団
アメリカ第7軍(パットン中将)
第2軍団
第1歩兵師団、第45歩兵師団
第82空挺師団
第2機甲師団
第3歩兵師団



もっとくやしがあったのは、メッシナ占領の先を越されたイギリス側だった。

ドイツ軍は9万名の兵士の内、6万名をうまくイタリア本土へ撤退させたのである。39日間の戦闘で、米英軍は31,000名の損害を出したのに対し、ドイツ軍は37,000

名、イタリア軍は130,000名を失った。

一方、シチリア島攻防戦の最中の7月24日、イタリアでは天地がひっくり返るような大事件が起っていた。

1922年以来、21年間もイタリアの首相として、ファシスト・イタリアの統領として君臨してきたムッソリーニが失脚し、軍の病院車でどこかに連れ去られたのだ。ドイツの諜報部員は、ヒトラーの命令に基づいてイタリア各地を探しまわり、ムッソリーニの影を求めた。

ムッソリーニに代って、ピエトロ・バドリオ元帥が国王エマヌエレ三世により首相に任命された。元帥は若い頃、北アフリカで現地

人と戦い、第二次大戦初期には参謀総長だった。しかし、1940年12月のギリシア侵入の失敗の責任をとって解任されていたのである。

彼はこっそりと連合軍に対して降伏条件を打ち合わせていた。このためヒトラーは、バドリオ政府が信頼できないとみて、主権を無視して公然とイタリアに兵力を送り込んだ。

サレルノ上陸作戦

ドイツ側では、シシリーを失って一步退いたケッセルリング元帥が、イタリア南部にフィーティングホフ大将の第10軍を配置して防衛戦の準備を整えていた。

ケッセルリング元帥は、次に敵がイタリア西岸のサレルノに上陸してくるに違いないと判断していたから、南部のカラブリア地方に第29機甲擲弾兵師団と、その北に第26機甲師団の2コ師団を配置しただけであり、主力はサレルノに置いておいた。

これに対して、地中海域を統括する第15軍集団司令官ハロルド・アレクサンダー大将(英)は、イタリア南部のカラブリア地方へ第8軍をシチリアから上陸させ、ドイツ軍の注意が南に向いたすきに、マーク・クラーク中将のアメリカ第5軍をサレルノへ上陸させる計画を立てた。黒いベレー帽のモントゴメリー大将は、1943年9月3日、メッシナ海峡をひとまたぎしてイタリア本土に上陸する。

しかし意外にも、最初の内ドイツ第29機甲擲弾兵師団の抵抗はほとんどなかった。

だが、イギリス軍が北上するにつれて、ドイツ軍は山地を利用し、小部隊で巧みに攻撃してくるようになった。(つづく)

ドイツ第10軍の編成	
第10軍 (フィーティングホフ大将)	
第58機甲軍団	
第16機甲師団	
第26機甲師団	
第29機甲擲弾兵師団	
第16機甲軍団	
第15機甲擲弾兵師団	
第1降下猟兵師団	
第11空挺軍団	
第2降下猟兵師団	
第3機甲擲弾兵師団	
国防軍予備	
ヘルマン・ゲーリング師団	

イタリア戦線におけるドイツ軍(2)

松井史衛



9月8日、バドリオ元帥のイタリア政府は、米英に対してラジオを通じて降伏を通報する。イタリア艦隊はドイツ軍に接収されないよう、マルタ島に向かって逃亡を開始した。国内は騒然となる。

こうなると、イタリア軍はいつドイツの敵になるかわからない。北部イタリア方面の防衛を担当し

ていたB軍集団司令官ロンメル元帥は、これを心配してケッセルリンク元帥に「イタリア兵は捕虜としてドイツ国内に収容すべきだ」と進言したほどである。

他方、ナポリ湾突入を目指し、ローマ占領を早めるためクラーク中将の第5軍は地中海を北進していた。その兵力は別表のようなも

のだが、シチリア島でも戦いを経験していない新手の兵力だ。

当時47歳のクラーク中将は、1年前にアイゼンハワー大将の副官を勤めて、カサブランカ上陸作戦を指揮し、第二次大戦後は国連軍司令官として東京に着任、朝鮮戦争の休戦協定に署名した人物として知られている。

イタリアが降伏したまさにその日—9月9日—の未明3時。イタリア本土への第一歩、サレルノ上陸作戦が決行された。作戦名はアバランシュ(雪崩)である。

リヒトホーフ元帥のドイツ第2翔軍は、リモコン式のグライダー(誘導)爆弾をもって輸送船団やイギリス戦艦ウォアスパイト(33,410t)等に攻撃を加えた。

ドイツ軍は、浜辺の周辺の高地から、上陸したアメリカ軍に対しお得意の8.8cm砲で砲撃し、シチリア島から引き上げてきた第14機甲軍団、つまりヘルマン・ゲーリン

アレキサンダー大将(左)とクラーク中将(中央)



グ機甲擲弾兵師団と第15機甲擲弾兵師団は、「シチリアの仇討ちだ」とばかり北から海辺に対して圧力を加えた。

さらに、新鋭の第3機甲擲弾兵師団も遅れて戦列に加わる。この部隊は対ロシア戦のベテランであり、スターリングラードで大損害を出したため、2カ月前にフランスで再編成され、増援のためイタリアに送られてきたものである。

アメリカ兵はM3ハーフトラックを先に立てて偵察を開始した。ドイツ軍は上陸3日目の9月12日には、早くも敵を二分してしまう。クラーク中將からの援助要請に対して、アメリカ第82空挺師団1300名が13日の夜明け前、東のドイツ第29機甲擲弾兵師団と西のアメリカ第36師団との間の140高地に降下した。また砲兵隊も続々と上陸、豊富な物量にものをいわせて射ちまくった。

そして9月16日には、イタリアの長靴半島を北上してきたイギリス第8軍が第5軍と握手することに成功した。

今までモンゴメリー大将と戦っていたドイツ第29機甲擲弾兵師団は、アメリカ軍のイタリア本土上陸によって背後を脅かされる形勢となった。そこでケッセルリンク元帥は、この2コ師団に対して、北に退いて南東からサレルノ戦に参加するよう命じていたのである。すでに「敵を海に追い落とすことはもはや困難になった」という報告が入っていた。

だがドイツ側にとって悪いニュースばかりではなかった。SSのグライダー部隊が、イタリア北部のグラン・サツ山荘に閉じ込められていたムツリーニを助け出したというのだ。これは胸のすくよ



南部イタリアを北上するイギリス軍とM10駆逐戦車

うな奇襲作戦だった。

そうこうする内、風光明媚なナポリには第15機甲擲弾兵師団がいたが、同港は10月1日、イギリス第10軍団によって占領された。

グスタフ・ラインでの防衛戦

ケッセルリンク元帥は、次に思い切ってナポリの後方まで退いてガリグリアノ川～カッシーノ山の線をそのまま北東岸まで延ばし、この線に強力な防衛戦を引くことを考えた。いわゆるグスタフ・ラインである。これによって連合軍を喰い止めようというのだ。

それは、第10軍の部隊で、北からハール大将の第51山岳兵軍団、南がシシリーの防衛でお馴染みだったフーベ大将指揮する第14機甲軍団という陣容だった。

彼の心配は、南イタリアの多くの飛行場に進出した米英軍の重爆撃機がドイツ本国の南部を爆撃しないかということだった。彼のこの不安は、この後現実になったのである。

グスタフ・ラインに対し、アメリカ第5軍が11月20日に攻撃を開始したが、満を持していたドイツ軍は一撃の下にこれをハネ返した。何しろ山と急流とを巧みに利用し、いちばん長い防禦陣地は深さ15km

にも及ぶのだ。秋になると雨のためイタリアの道路は一面泥沼と化し、川は水量を増す。

さすがのジェネラル・モーターズ社製の6輪トラックも車輪を空回りさせるだけで進まなくなる。イタリアの農夫に頼んでロバの馬車で軍需品を運んでもらう一幕もあった。

山地に入ったテキサス出身の第36歩兵師団は、ドイツ兵に包囲されてあわやという危機にみまわれた。その時、背の低い兵士1コ連隊が現われて、かなりの犠牲を出しつつも第36師団を救出した。ドイツ側が電話の盗聴にかかると、

ドイツ南方軍 (ケッセルリンク元帥) 1944/5~6

- 第10軍 (フィーティングホフ上級大将)
- 第14機甲軍団
- 第15機甲擲弾兵師団
- 第94機甲師団
- 第51山岳軍団
- 第1降下猟兵師団
- 第5山岳師団
- 第44歩兵師団
- 第14軍 (マッケンゼン上級大将)
- 第76機甲軍団
- 第26機甲師団
- 第362歩兵師団
- 第712歩兵師団
- 第1降下猟兵軍団
- 第4降下猟兵師団
- 第3機甲擲弾兵師団
- 第65歩兵師団
- 予備
- 第90機甲擲弾兵師団



射撃する列車砲アンツィオ・アニー
彼等はドイツ兵が聞いたこともない
ような言葉（日本語）に切り替

えた。これこそハワイ出身の第442
連隊戦闘チーム、すなわち「二世
部隊」であった。

この苦戦に対して、240mm榴弾
砲と230mmカノン砲がアメリカか
ら急送されることになった。

山岳地帯には、新来のドイツ第
5山岳兵師団と第44歩兵師団が投
入された。前者は2年前、クレタ
島へのグライダー降下作戦に参加
したこともあり、後者はポーラン
ドやフランス進攻の経験を持つオ
ーストリア出身者からなっていた。

これに対し、連合軍も第2モロ
ッコ師団、第3アルジェリア師団
のような自由フランス軍の部隊を
アメリカ第5軍に加え、激しい山
岳戦を繰り返した。山地では連合

軍側も戦車を使うことができない
のがドイツ側の狙いだった。

このグスタフ・ラインの中でも、
もっとも頑強に抵抗したのは南部
のモンテ・カッシーノ（モンテと
はイタリア語の山の意。英語のマ
ウントにあたる）山付近だった。

高さ3000m（海拔）の山頂には
修道院が建っている。

中世の529年、聖徒ベネディクト
が建てたものであり、重要な文化
遺産がたくさん保存されているこ
とでも有名な場所で、長さ200m
にも及ぶ4階建ての寺院もまた重
要な文化財だった。

山のふもとからアメリカ第2軍
団がいくら攻撃しても、そのたび
ごとにどこからか正確な砲撃が浴
びせられる。「付近でドイツ兵の姿
を見た」という村人もあった。

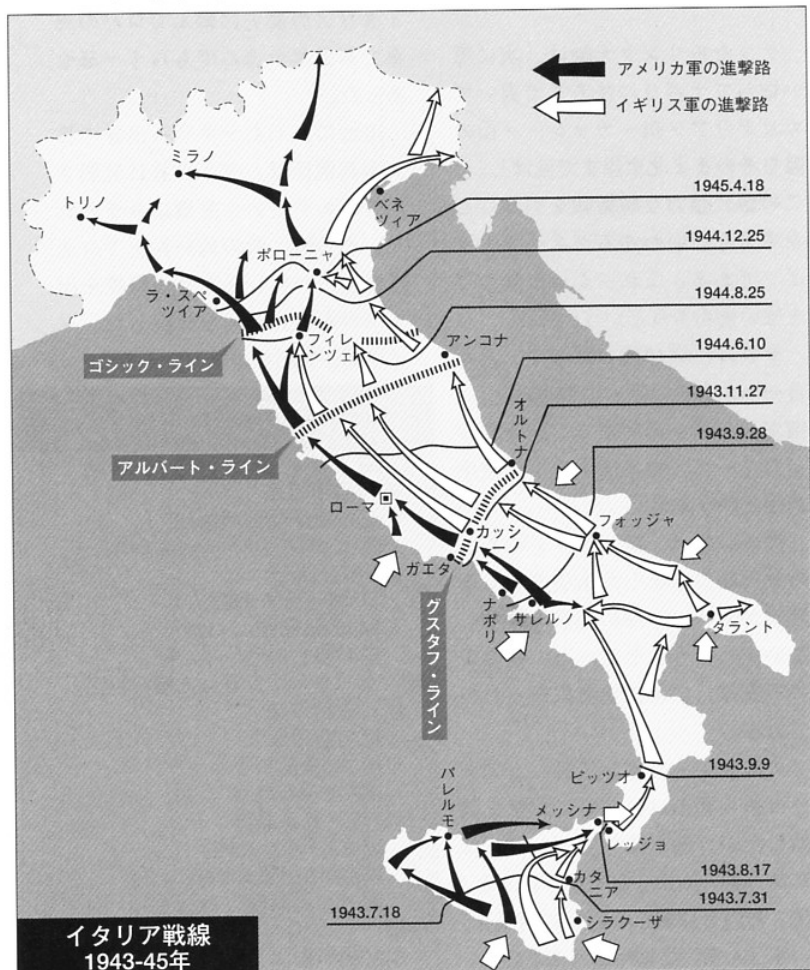
このモンテ・カッシーノの攻防
戦こそ、第二次大戦における最も
激しい山岳戦がくり返された戦跡
といっても過言ではない。

年が変わって1944年になったが、
カッシーノはいぜんとして連合軍
の行手を阻んでいた。アメリカ軍
がいくら攻撃しても追い払われて
しまう。

当時、この山はドイツ第1降下
猟兵師団が守っていた。そして、
険しい地形を利用して頑強に抵抗
したのである。カッシーノ山はま
るで日露戦争における旅順攻防戦
のような出血の代名詞となった。

アメリカ軍は、どこからともな
く飛んでくるドイツ軍の砲弾が正
確なことから、竹とんぼのような
L4直協機グラスホッパーを飛ば
して付近を偵察した結果、「修道院
にドイツ軍の観測所が設けられて
いるのではあるまいか」という疑
いが生じた。

こうして背に腹は変えられず、



イタリア戦線
1943-45年

文化財の破壊をあえてしても、連合軍はこの山頂の寺院の爆撃を決心したのである。

2月14日と15日、第12空軍のB-25、B-26等の双発爆撃機の大群がカッシーノ山に大爆撃を加えた。

ドイツ軍はこれに対して、「連合軍はイタリアの貴重な文化遺産を破壊した」と宣伝する。

大爆撃に呼応して、第4インド師団と第2ニュージーランド師団が突撃して一度は山頂に達した。

しかし、第1降下猟兵師団は煙幕を利用して2月18日、一度占領された山頂を奪い返した。数m離れて石を投げ合う場合さえ展開する。

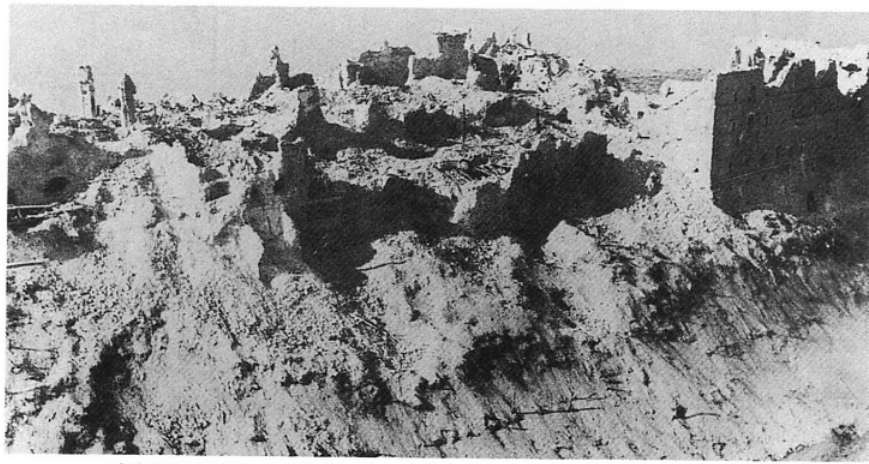
しかし5月18日、第四次の総攻撃が決行され、北から突撃したポーランド第2軍団とイギリス第4師団は、ついにモンテ・カッシーノに旗を立てたのである。ドイツ軍はその前夜、国道6号線に沿って巧みに北に撤退していた。

アンツィオ上陸と ドイツ軍最後の戦闘

話はさかのぼるが、手詰まりとなったグスタフ・ライン突破のため、アメリカ第6軍団が1944年1月22日、ローマの南40kmのアンツィオに上陸した。イギリス第1及びアメリカ第3歩兵師団、第2パラシュート大隊が中心である。

半島の西側を防衛していたマッケンゼン上級大将のドイツ第14軍は、背後に敵を受けた格好だ。しかしヘルマン・ゲーリング機甲擲弾兵師団の1コ連隊と第29機甲擲弾兵師団の1コ大隊を使って、東と北から反撃に出た。

マッケンゼン上級大将は騎兵出身であり、彼の第14軍は2カ月前に編成されたばかりの新兵力だった。この部隊は、上陸したルーカ



連合軍の爆撃により廃墟となったモンテ・カッシーノ修道院

ス中將のアメリカ第6軍団を海岸付近に釘づけにしてしまう。

実はマッケンゼン將軍の下には、秘密兵器が密かに隠されていた。28cmの長距離列車砲2門だ。何しろ1門218tの重さがあり、最大射程は59km（戦艦大和級の46cm砲が41km）にも達する。K-5型と称するこの砲は、40度あまりの高い迎角をかけ、射ち終るとまたトンネルの中に隠されるので、連合軍の偵察機が目も皿のようにして探してもなかなか見つからない。

1門はレオパルト、もう1門はロベルトと呼ばれ、カーキ色の車体にコゲ茶色のカムフラージュが施してあった。そしてこの砲は、数週間に渡って火を吐き続けたのである。

1門あたり1コ砲兵中隊の兵が付き、発射速度は1時間につき8発以上に達し、砲弾1発の重量は225kgもあった。制空権のないドイツ軍にとって、レール上を走る長距離カノン砲だけが上陸地点を“空襲”できる唯一の武器だった。このため、連合軍には軍需品や兵員にかなりの損害が出た。

この列車砲に連合軍の兵達は、「アンツィオ・アニー」という仇名を付けた。アニーとは映画にもなった西部劇ミュージカルに出てくる拳銃の上手い女の子の名前であ

る。

しかし列車砲の奮戦にもかかわらず、またしても戦況は膠着状態となった。

これを打開するため、連合軍はアメリカ第4軍を新たに投入して1944年5月28日、アンツィオ上陸作戦を行なった。圧倒的な兵力差と疲れ切った兵士——ドイツ軍には連合軍のような交代の予備部隊などなかった——のため、ドイツ第14軍司令官マッケンゼン上級大将はとうとう退却を下命したのである。

ケッセルリンク元帥は、ローマで抵抗しても無駄だということを充分知っていた。市街戦をやれば、市民に犠牲を出し、その反感を買うばかりだ。そこで彼は「ローマは無防備都市である」と宣言し、自ら兵力を撤退させた。そして、アメリカ第2軍団の第86歩兵師団

第3次カッシーノ攻撃時における 連合軍の戦闘序列

第15軍集団（アレキサンダー大将）
第8軍（モンゴメリー大将）
ポーランド第2軍団（アンダース將軍）
ポーランド第3、第5師団
イギリス第13軍団（カークマン將軍）
第4師団、第78師団、第6装甲師団、
インド第8師団
第5軍（クラーク中將）
フランス遠征軍団（ジュアン將軍）
フランス第1、第2、第3、第4師団
アメリカ第2軍団（キース將軍）
第85師団、第88師団



北イタリアの山岳地帯で防禦戦を指揮するケッセルリンク元帥

がローマに入城したのである。

ローマは6月4日—ノルマンディー上陸作戦の2日前—に解放された。今ではすっかりドイツ嫌いとなったイタリア人は、熱狂してアメリカ軍を歓迎する。

そして、ケッセルリンク元帥の南方軍総司令官という肩書きはC軍集団司令官に変わった。地中海とイタリア中・南部を失って今さら南方でもないからだろう。

当時、ドイツ軍の軍用車輛は連合軍の戦術空軍に狙われて炎上するものが多く、これが補給の途絶をもたらしした。

総崩れとなった戦線を整理するため、一步退いたドイツ軍は、ローマ北西300kmの西はアルノ川から東はアドリア海のファernoに至

る間に新しい戦線を張った。これがゴシック・ラインで、グスタフ・ラインの再現である。しかし、8月30日に始まった攻撃で、ゴシック・ラインは意外な脆さを露呈してしまう。

それでも、第10軍司令官フィーティングホフ大將は、3カ月近くもアメリカ第5軍とイギリス第8軍の北上を抑えていた。彼の防戦は、ケッセルリンク元帥はもちろん、連合軍からも高く評価されている。

1945年3月9日、ケッセルリンク元帥はドイツに召還され、ヒトラー総統から西部戦線を担当する西方軍総司令官に任命された。代ってフィーティングホフ上級大將がC軍集団を受け継いだ。長らく

機甲部隊を指揮してきたベテランだ。

彼はアルプスを背にして最後の防衛戦に入った。いよいよ追いつめられて、背水の陣ならぬ背山の陣である。しかし、それから2カ月後の4月29日、彼はこの方面のドイツ軍を代表して降伏文書にサインしなければならなかった。

イタリアにおけるドイツ軍の作戦は、バルジの戦いのような緊迫したシーンや大機甲部隊の衝突がないため、とくなくおざりにされ易い。その兵力からいっても、北ヨーロッパよりはるかに少なく、東部戦線の十数分の一に過ぎない。

しかし、イタリアのドイツ兵はよくその任務を果たしたことは、この戦記を読んで理解していただけたと思う。

なお、ケッセルリンク元帥は、戦後、ベニスにおける戦犯裁判の結果、興奮したイタリア人によって死刑を宣告されたが、その後の減刑運動によって終身禁固に減刑され、後に釈放された。

そしてアメリカに渡って回顧録を出版している。(了)

軍事研究

Japan Military Review

定価980円
(毎月10日発行)

最新兵器の解説から戦史の検証まで！
湾岸戦争、アフガン戦争、イスラエル・パレスチナ紛争、20世紀の戦争とこれからの戦争を網羅するこの1冊!!

自衛隊、朝鮮半島、中国、インド・パキスタンそして世界制覇を目論むアメリカ、世界の軍隊と最新の軍事技術を徹底的に解明!



(株) ジャパン・ミリタリー・レビュー
〒160-0004 東京都新宿区四谷 3-1-5
ロリエ四谷ビル 7F
Tel 03-5366-3752 振替 00110・8・20047